

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19320117
 研究課題名（和文） ヨーロッパ「歴史の場」に関する研究

研究課題名（英文） Historic Sites in Europe

研究代表者

若尾 祐司 (WAKAO YUJI)
 名古屋大学・大学院文学研究科・教授
 研究者番号：70044857

研究成果の概要：

研究会を継続して行い、ODクラスの研究協力者9名の執筆を含め、モノグラフ『歴史の場』（ミネルヴァ書房）刊行の準備を完了させた。アメリカ史の研究者とも連携し、同書は国別編成でアメリカ史4、イギリス史3、フランス史2、東欧・北欧史3、ドイツ史6と広く欧米をカバーした。これと並んで、研究成果報告書『ヨーロッパ「歴史の場」に関する研究』も取りまとめ、欧米の記憶・顕彰文化の多様な姿と特質を明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2008年度	3,200,000	960,000	4,160,000
総計	8,100,000	2,430,000	10,530,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：西洋史、歴史の場、記憶・顕彰行動、国民意識、記念碑・墓地

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は平成14～17年度科学研究費補助金を得て、「史誌・記念碑・郷土」を素材とし、記憶の歴史に関する国際比較を試みた。その成果は、若尾祐司・羽賀祥二編『記録と記憶の比較文化史』（名古屋大学出版会、2005年）に取りまとめられた。

同時に、この作業の中で、たとえば欧米枠など単一の文化圏における記憶・顕彰文化の理解を一層深める課題が、広域的な異文化比較を行う前提作業として必要であることが、強く自覚された。ヨーロッパとアジアといった広域的な異文化比較のためには、あらかじ

めヨーロッパ内部における記憶文化の諸相や特徴を立ち入って検討し、各国の国民枠を超えるヨーロッパ記憶文化の特質を理解しておくことが必要である。こうした自覚から、近代ヨーロッパにおける各国の記憶行動を多面的に検討し、その共通の特質を把握するために、墓地をも含む「ヨーロッパ歴史の場」に関する研究プロジェクトを立ち上げる構想に至った。

2. 研究の目的

近代ヨーロッパという同一文化圏の中で、多様な諸国民の個別事例にそくして、歴史や

人物を記憶し顕彰する行動を考察の対象とする。それら個別のケース・スタディを通して、記憶・顕彰行動の多様な姿を把握しつつ、その相互比較により、国民的な差異とともにヨーロッパ・レベルでの類似点を理解することが、本プロジェクトの目的である。

また、和田光弘氏（名古屋大学教授）を研究代表者とする平成 19～21 年度科研プロジェクト「近代アメリカにおける記憶・シンボル・記念碑——ナショナル・アイデンティティの視点から——」と連携して、ヨーロッパに限定するというよりも欧米枠で、近代における記憶行動と記念碑文化の特徴・多様性を解明する。

ピエール・ノラ編『記憶の場』（原書 1984～92 年、主要部分の翻訳は谷川稔監訳、岩波書店、2002～2003 年）以来、ヨーロッパ各国で「記憶の歴史学」はモードとなり、国民的・集合的記憶の「固定在庫」が明らかにされている。しかし、国民記念碑のみならず個人の顕彰など、多様な記憶・顕彰行動を各国の歴史の中から断片として取り出し、相互に比較するグローバル視点の作業は、「記憶の歴史学」の厚い蓄積にも関わらず、未開拓の分野である。

3. 研究の方法

個別のケース・スタディを広く欧米各国から取り上げ検討するために、本プロジェクトの研究分担者はイギリス、フランス、ドイツとヨーロッパ主要国にまたがる。さらに OD クラスの事実上の研究協力者 9 名を加え、これら主要国の事例研究を厚くするのみならず、東欧・北欧・ロシアへと広くヨーロッパ各国をカバーして、広い視野で多面的に事例研究に取り組む。アルプス以北に限られ、地中海圏のケース・スタディを欠いているが、この点は今後の課題である。

この個別の事例研究は現場主義をモットーとし、対象とする「歴史の場」を訪問し、現場に直接触れるとともに、現地での資料収集を行う。同時に、各国における「記憶の歴史学」の研究状況を把握し、それぞれの個別事例研究について、研究史上の位置を見定める。その上で、それぞれのケース・スタディについて研究会で報告し、本研究グループ全体の共通認識とする。研究会は隔月で開催し、併せて研究協力者の研究の推進を援助する。

また、欧米歴史学の現況、とりわけ欧米歴史学の主流をなしてきた社会史研究と「記憶の歴史学」の関連に関する理解を得るために、著名な歴史家をヨーロッパから研究会に招き、意見交換を行う。

そうした作業を通して本プロジェクトの研究成果を若尾祐司・和田光弘編『歴史の場——史跡・記念碑・記憶——』（ミネルヴァ書房、2009 年刊行予定）へと集約し、刊行の

準備を進める。

4. 研究成果

本プロジェクトの研究成果は、若尾祐司・和田光弘編『歴史の場——史跡・記念碑・記憶——』（ミネルヴァ書房、2009 年刊行予定）に集約され、刊行の準備は完了した。その目次は以下の通りである。

はじめに 若尾祐司

アメリカ

- 1 眠れぬ死者——ポカホンタス、ヨークタウン、ワシントン 和田光弘
- 2 奴隷制の記憶とニューヨーク——ローマンハッタンのアフリカ人墓地保存問題 久田由佳子
- 3 海賊の息づく港町ポートロイヤル 笠井俊和
- 4 イギリス領北米植民地への移住の経験と記憶——一七〇年パラティン人移民の軌跡 森丈夫

イギリス

- 5 ニュートンのりんごの木——記念樹の誕生 大野誠
- 6 リブ=ラブ派経営者トマス・ブラッシー追想 佐喜真望
- 7 救済と恥辱の場ワークハウス 小島崇

フランス

- 8 パリ街角の肖像——記憶を反芻する意味と意義 高木勇夫
- 9 パリの墓地ペール・ラシェーズ 櫻井瑠衣

東欧・北欧

- 10 対ナポレオン祖国戦争の記念事業——ロシアの場合 島山禎
- 11 メンデルを顕彰する都市ブルノ 京極俊明
- 12 対ソ戦場の地カレリア——叙事詩、交響曲、そして戦争 杉藤真木子

ドイツ

- 13 ミュンヘンの聖母教会と皇帝墓 早坂泰行
- 14 改革派教会会議の記憶——エムデンの事例 望月秀人
- 15 四八年革命とケルン大聖堂建設祭 棚橋信明
- 16 アジア探訪者ケンペルの顕彰史 鈴木楠緒子
- 17 フランクフルト・アム・マインの戦争記念碑——世界大戦の記憶 北村陽子
- 18 「歴史の場」広島への記憶——一九五〇年代のドイツ語圏から 若尾祐司

この目次一覧が示すように、事例研究は、国別ではアメリカ史4、イギリス史3、フランス史2、東欧・北欧史3、ドイツ史6からなる。内容的には、個人に関する記念碑5、戦争関係記念碑6、墓地・墓碑3、記念碑空間2、その他4と多岐に渡る。こうした欧米各国にまたがる記念・顕彰行動の多面的な検討により、欧米枠における記憶文化の多様な姿とともに、その特質が提示されている。

加えて、研究成果報告書『ヨーロッパ「歴史の場」に関する研究』を取りまとめた。パリの肖像彫刻、ニュートンのりんごの木、ケルン大聖堂建設祭やドイツの戦争記念碑といった前記の著作を補完する論稿と並んで、ドイツの遺産保存史、イギリスの裁判所の記憶、アメリカの船乗りの歴史をテーマとする個別論稿を収録している。

本プロジェクトを通して得た結論は、記憶の文化における欧米枠での国民的な差異や共通性といった問題よりも、地域の文化的な個性を表示するものとして、記憶の文化を地域住民の視点から把握する課題である。たしかにフランスの場合、革命による中央集権的な国民国家形成により、記憶の文化も国民レベルを中心に構築されていった、といえるかもしれない。しかし、ヨーロッパ全体を見た場合、史跡・記念碑研究の課題は国民レベルというよりも、地域・都市レベルでの文化的アイデンティティ形成へと収斂していくように思われる。したがって、たとえば個別の都市をモニュメント空間として把握し、その歴史をたどることにより、都市の政治文化史レベルで、より緻密でグローバルな比較研究を可能とする、「記憶の歴史学」への道が開かれるように思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

- ① 栗田和典「セイラ・マルカムの記憶——殺人者にして弁護人(前)」『ことばと文化』(静岡県立大学英米文化研究室)12号、2009年2月、17-31ページ、査読無。
- ② 大野誠「エッセイ・レビュー: ニュートン研究の現状、1998-2007年刊行の著作」『化学史研究』125号、2008年、230-234ページ、査読有。
- ③ 高木勇夫・日野安昭「社会工学プレゼンテーション」『キャリアサポートオフィス年報』3号、2008年3月、36-46ページ、査読有。
- ④ 棚橋信明「近代ドイツの諸都市における

人口の自然動態——19世紀中葉以降の出生率と死亡率の変動に関する統計の整理——」『横浜国立大学・教育人間科学部紀要 III (社会科学)』10号、2008年2月、71-93ページ、査読無。

- ⑤ 栗田和典「回顧と展望: 近代イギリス」『史学雑誌』106巻5号、2007年5月、333-340ページ、査読有。
- ⑥ 若尾祐司「1850・60年代ドイツの歴史協会——ナッサウ歴史協会と全体協会——」『名古屋大学法政論集』217号、2007年4月、1-42ページ、査読無。
- ⑦ 高木勇夫「キャリア教育の実践」『キャリアオフィス年報』2号、2007年3月、20-39ページ、査読無。

〔学会発表〕(計2件)

- ① 若尾祐司「ヨーロッパ家族史の影響」比較家族史学会第50回記念大会シンポジウム『戦後日本の家族研究と21世紀の課題』東北大学、2008年6月22日。
- ② 大野誠「工学の補助学としての化学——工芸振興協会設立時の活動から——」化学史学会シンポジウム『18世紀の化学の諸相: 産業・社会・ジェンダー』東京工業大学、2008年7月5日。

〔図書〕(計4件)

- ① 若尾祐司「多産多死から子ども二人家族の時代へ」姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、2009年、167-189ページ。
- ② 高木勇夫「<棒の手>源氏天流をめぐって——共同体の生と死」船井廣則・松本芳明・三井悦子編『スポーツ学の冒険』黎明書房、2009年、73-82ページ。
- ③ ヨーゼフ・エーマー著、若尾祐司・魚住明代訳『近代ドイツ人口史——人口学研究の傾向と基本問題——』昭和堂、2008年、xxvi+224ページ。
- ④ 栗田和典「民衆・犯罪・処刑」近藤和彦・伊藤毅編『江戸とロンドン——別冊都市史研究』山川出版社、2007年、54-64ページ。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若尾 祐司 (WAKAO YUJI)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 70044857

(2) 研究分担者

高木 勇夫 (TAKAGI ISAO)
名古屋工業大学・工学研究科・教授
研究者番号: 20179419

大野 誠 (OHNO MAKOTO)
愛知県立大学・外国語学部・教授
研究者番号：60233227

栗田 和典 (KURITA KAZUNORI)
静岡県立大学・国際関係学部・教授
研究者番号：90249300

(3) 連携研究者

棚橋 信明 (TANAHASHI NOBUAKI)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：80323921

(4) 研究協力者

小島 崇 (KOJIMA TAKASHI)
愛知県立大学・兼任講師

畠山 禎 (HATAKEYAMA TADASHI)
名城大学・兼任講師

京極 俊明 (KYOGOKU TOSHIAKI)
名古屋大学・兼任講師

鈴木 (前田) 櫛緒子 (SUZUKI (MAEDA) NAKO)

山梨県立大学・兼任講師

北村 陽子 (KITAMURA YOKO)
名城大学・兼任講師

望月 秀人 (MOCHIZUKI HIDETO)
日本福祉大学・兼任講師

早坂 泰行 (HAYASAKA HIROYUKI)
名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程
満期退学

杉藤 真木子 (SUGITOH MAKIKO)
名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程
3年

櫻井 瑠衣 (SAKURAI RUI)
横浜国立大学大学院国際社会科学研究所法
科大学院事務補佐員

笠井 俊和 (KASAI TOSHIKAZU)
日本学術振興会特別研究員 (PD)